



Data

監督: スティーヴン・フリアーズ
 原作: シュラビニ・パス
 出演: ジュディ・デンチ/アリ・ファザル/エディ・イザード/アディール・アクタル/マイケル・ガンボン/ティム・ビゴット=スミス/オリビア・ウィリアムズ/フェネラ・ウールガー/ポール・ヒギンズ/ロビン・ソーンズ/ジュリアン・ワダム/サイモン・キャロウ

👁️👁️ みどころ

権力者はいくら権力を握っても、いくら子供や孫に恵まれても、所詮孤独なもの。とりわけその晩年は……。また、誰にでも秘密はあるもの。しかし、在位50周年を迎えた御年68歳のヴィクトリア女王の“1世紀もの間、隠されてきた真実の物語”とは？

ハンサムで長身しかも快活で知的な話題でいっぱい！そんなインド人青年なら私のお気に入りの先生に！それでもいいのだが、限度を過ぎると……？

本来『ローマの休日』(53年)と対比すべきキュートな物語だが、如何せんヒロインの魅力の差は歴然！したがって、本作はそれなりの採点で……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■誰にでも秘密はあるものだが・・・■□■

『帝国総督 最後の家』(17年)は、1947年8月15日に実現したインドとパキスタンの大英帝国からの“分離独立”という偉業を教えてくれるいい素材だった(『シネマ42』119頁)。それに対して、“ほぼ史実に基づいている”という本作は、邦題通り『ヴィクトリア女王 最期の秘密』を教えてくれるものだが、それは、女王の晩年を輝かせたインド人従者との強い絆で、一世紀もの間隠されてきた真実の物語らしい。

本作導入部は、1887年に開催されたヴィクトリア女王(ジュディ・デンチ)の即位50周年記念の式典。そこで、記念金貨の贈呈役に選ばれたインドの若者アブドゥル(アリ・ファザル)がその任務を遂行している時、2人の視線がふと……。かつて、工藤静香が歌ったヒット曲「MUGO・ん・色っほい」の歌詞は「目と目が通じ合う かすかにん、色っほい」だった、が……。もっとも、このお役目を実行するについて、アブドゥルは

「決して女王陛下と目を合わせてはならない」と厳命されていたはずだが・・・。

■□■権力者の晩年は孤独！女王の心の絆は？■□■

イギリス女王であると同時にインド帝国の皇帝でもあるヴィクトリア女王がいくら権力を持っていても、いくら子供や孫に恵まれていても、その晩年が孤独だったのは仕方ない。したがって、そんな女王の心を開いたのが長身で、ハンサムそして何かと知識が深く快活なインド人青年アブドゥルだったというのはわからないでもない。しかし、その関係はあくまで「君主と従者」だから、暇な時々話し相手になるのはオーケーでも、常に身の周りに置いたり、ヒンズー語学習の教師や人生の先生にしたり、インドから妻を呼び寄せて自宅を与えてやったり、挙句の果ては爵位まで授けるというのは如何なもの・・・？しかも、ヴィクトリア女王はイギリス国教会のボスも兼ねているのだから、その女王がイスラム教の勉強をしたり、アラーの教えに興味をもっていくのは如何なもの・・・？

跡継ぎになるべき長男のエドワード7世／パーティー（エディ・イザード）をはじめ女王の側近たちがそう心配したのは当然だ。そんな中でも、アブドゥルは側近たちの反発の目を柳に風と受け流しながら女王陛下との“心の絆”を深めていたが・・・。

■□■女王の横暴には職員総辞職！その結末は？■□■

議院内閣制のイギリスに、内閣総辞職や国会解散などの制度があることはよく知っているが、王室内に“職員の総辞職”があることを私は寡聞にして知らなかった。本作中盤は、アブドゥルに対して爵位を授けるという女王の決定に納得できない職員が、一致してその方針の撤回を迫り、もしそれが受け入れられなければ“職員が総辞職する”と恫喝するシークエンスが登場するのでそれに注目！

現在アメリカでは、メキシコからの移民を阻止する“壁の建設”に伴う予算を巡って、トランプ大統領と議会（野党民主党）が対立し、政府機関の一時閉鎖という異常事態が続いているが、これと同じような、のっぴきならない対立構造になってしまったわけだ。トランプ大統領は現在一部議歩の姿勢を示して懸命に議会との妥協点を探っているが、本作を観ていると、ヴィクトリア女王も微妙な落としどころを提案。それは、爵位の授与はやめる代わりに、ヴィクトリア賞の1つでもあるコマンダー賞を授与するというものだ。しかし、これにて一件落着・・・？

■□■出自調査は？身体検査は？その活用は？■□■

50周年の記念式典以降、あれよあれよと言う間にアブドゥルに対して心を開き、“先生”にしているヴィクトリア女王を、側近たちが心配したのは当然。そこで、側近たちが「アブドゥルのあらさがしを！」とばかりにその“出自”を調べてみると、アブドゥルは下層階級の出身だ、等々のデータが出たから万々歳！さらに“身体検査”をしてみると、何と

アブドゥルは淋病だという証拠が出てきたから、やったー！これを女王に見せれば、アブドゥルの失脚はミエミエ！そう確信した側近たちがその資料を提出すると、女王は・・・？
かつて、ロシアにはラスプーチンという“怪僧”がいたし、日本にも弓削道鏡という怪僧がいた。彼らは時の女王の側近として仕えながら陰の力を発揮したが、善良な側近たちにとっては、アブドゥルはまさにそれと同じようなもの。したがって、女王陛下からアブドゥルを排除することは自分たち忠臣の義務だと考えてさまざまな証拠を提出したわけだが、それでも女王は、側近たちのそんな意見具申をはねつけ、あくまでアブドゥルを信頼したから、アレレ・・・。ところが、ある日、イスラム教徒が女王の暗殺を企んだことがあるという歴史的事実を突き付けられると、先生のアブドゥルからそんな事実を教わっていないことに女王の不満が爆発！ここでついにアブドゥルにはインドへの帰国命令が下されたが・・・。

■□■本作の魅力は？■□■

『英国総督 最後の家』は大英帝国からのインドの独立という歴史上の偉業についての壮大なドラマだったから、見応え十分の歴史モノだった。しかし、本作はあくまで1世紀もの間隠されてきた、アブドゥルの日記に基づくヴィクトリア女王晩年のちょっとしたドラマだから、所詮それだけのもの。もっとも、『ローマの休日』(53年)だって、ローマにやってきたアン王女の数日間の冒険を描いただけのちょっとした物語にすぎなかったが、スクリーン上はオードリー・ヘプバーン扮するアン王女の魅力にあふれていたから、ワクワクドキドキの素晴らしい映画になっていた。しかし、本作にみるジュディ・デンチ扮するヴィクトリア女王は、所詮太っちょのおばさんだから、魅力いっぱいと言えないのは仕方ない。

なお、本作は第90回アカデミー賞の衣装デザイン賞、メイクアップ&ヘアスタイリング賞にはノミネートされているが、私はその方面にはあまり興味はない。また、第75回ゴールデン・グローブ賞と第24回全米映画俳優組合賞ではジュディ・デンチが主演女優賞にノミネートされているが、これが精いっぱい、受賞はきつとムリだろう。

2019(平成31)年1月31日記